

**【目的】** ケモカイン受容体 XCR1 を発現する樹状細胞サブセット (XCR1<sup>+</sup>DC) の新しい機能的意義として、腸管 T 細胞とのクロストークを介して腸管免疫の恒常性を制御していることをこれまでに明らかにしてきた。本研究では、その制御機構のさらなる解明を進めた。

**【方法】** XCR1<sup>+</sup>DC を恒常的に欠失するマウス (XCR1-DTA マウス) において、腸管特有の T 細胞サブセットおよびの前駆細胞に関して解析を行った。また、XCR1 以外に、XCR1<sup>+</sup>DC 優位に発現する機能分子群の欠損マウスの作製を進め、GTP 分解活性を有し、エンドソームやリソソームに局在する Rab7b に関して欠損マウスを解析した。

**【結果】** XCR1-DTA マウスにおいて、腸管特有のサブセットが著明に減少していたが、その前駆細胞に関しては数も分化能も保たれていた。この結果から、XCR1<sup>+</sup>DC が恒常的に欠失しても、腸管 T 細胞の前駆細胞は存在し続けること、そして腸管局所における XCR1<sup>+</sup>DC の重要性が明らかになった。また、Rab7 欠損マウスにおいては、腸管 T 細胞は数としては正常に存在していた。今後、T 細胞や DC における膜タンパクの表現型や様々な免疫アジュバントあるいは病原体に対する腸管免疫応答を解析すると共に、他の候補機能分子の解析を進める。

XCR1 を発現する樹状細胞による腸管免疫制御

